

第9回 日文研フォーラム

■  
—— 中国人留学生の見た ——

**明治日本**

Meiji Japan

Viewed through the Eyes of Chinese Students

■  
巖 安 生

Yan An Sheng

---

国際日本文化研究センター



日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 梅原猛





● テーマ ●  
— 中国人留学生の見た —  
明治日本  
Meiji Japan

Viewed through the Eyes of Chinese Students

● 発表者 ●  
嚴 安 生  
Yan An Sheng



## 発表者紹介

嚴 安 生  
Yan An Sheng  
北京外国語学院助教授

1937年生れ。中国外交学院（国際関係論、日本語専攻）を1961年に卒業、東京大学大学院（比較文学比較文化専攻）を1981年に修了。1962年より現職。1988年10月より国際交流基金フェローシップとして来日、東京大学で客員研究員として研究中。専門は日本語。

主な著作：

「日本留学と“中体西用”」正・続（東大比較文学会『比較文学研究』48、51号、同「金素雲賞」受賞）

「中国近代日本語教育史論稿」（北京『外語教育与研究』に二回公表、未完）

『近代中国人留日精神史』（近く刊行予定）  
他『日本語精讀教材』『日本近代文学選講』数種（学内テキスト）

## はじめに

近代における中国人の日本留学は、甲午（日清）戦争後の一八九六年、駐日公使裕庚が西園寺公望を通して嘉納治五郎に教育を依頼した十三人を第一陣として、その二年後に出された張之洞の『勸学篇』が大規模の留学運動の進軍ラッパとなった、というのが定説になっております。さらに具体的に見るなら、留学運動の決定的な動因は、対日戦争の敗北にほかなりません。「わが国が四千余年の深き夢から呼び醒まされたのは、実に甲午の敗戦で台湾を割譲され、二百兆両を賠償させられた後に始まった」（梁啓超『戊戌政変記』）であり、目を醒ましてみて「日本は小国のみ、何ぞ興るのにわかるや」（『勸学篇』）という問題意識が全士大夫階級に起こったところへ、日本の参謀本部遊説班（一八九八・一、神尾光臣ら三人）を先発とした政軍官学各界による中国抱き込み工作と留学勧誘が始まったわけです。それがそのまま始動のエネルギーになった（張の『勸学篇』も神尾遊説のあとに生れたもの）というのが、中国人日本留学の歴史の起点の真相です。日本留学運動はこうしたスタートの事情からして、その動機と、対日認識や感情などの面において、きわめて複雑微妙な様相を呈さざるを得なかったわけです。

留学先・日本に求めたもの

身軽万里易為客　　身軽くして万里客になりやすし

心有千秋豈学人　　心に千秋あり豈に人に学ばんや

暫向扶桑賒日色　　暫くは扶桑に向かい日色を賒らん

後來分作両家春　　後に来たりて両家の春を分作せん

この詩は、いよいよ笈を負って旅たつ湖南省の某留學生の詠んだものです。彼ら一行を送る省教育長官の壮行の辞もふるっています。曰く「諸君は島国に学ぶのを恥と思え、その学問を崇めてもその性質を崇めるな」。われは千秋の大国で向こうは賤しい島国だから、と、これは中華思想、悪く言えばそれ故の尊大癖と片づけられますが、一方、一行中のもう一人、のち大森海岸で憤死した陳天華は「恥を忍んで仇敵の国に学び、力をつけて祖国を救おう」と言っています。ですから結論から言いますと、表層では「見なおした、学ぼう」でありながら、深層では古い誇りと新しい傷のため心中穏やかならぬところが多い、という表裏の両面が十九世紀末以来中国人の対日観の基本パターンを構成しており、その相反した二面が国を救うという至上命令の下で行動の次元に統一されたのが、日本留学運動にほかなりません。

ところで当時、この構図をもっとも明白に、かつ滋味のある表現で言い表わすことの出来たもう一人の湖南人がいました。蔡鐸です。

1902年、蔡は留学を勧める「湖南の士紳に致す書」の中で、「絶学の先驅、文明の祖国を以てして自らへりくだり、虚心に下問し、自彊やまない後進、文明開化の新都に学ぼう」と呼びかけました。その留学経験（1899年来日、正式の学校に入って日本人と一緒に勉強し、同期に荒木禎夫、小磯国昭らのいる士官学校をトップで卒業しました）を反映して、蔡の方は先の後輩たちに比べて見識が高く、態度も素直なものでした。とはいえ、この「下問」はあくまで「文明の祖国」からの留学生という資格においてのものであり、さらに、欧米を含む下問の対象との関係を次のように規定しています。

欧米を農工とし、日本を商販として、吾輩主人はそれを取って用い、当面の必要に間にあわせればよい。後日、わが文治が日に興り学界が超軼すれば、ふたたび創って人に恵み、東西の洋をして我にもとめせしむ。

やはり中華中心、天下われの用いる所なり、という伝統的姿勢にゆるぎはありませんでした。

それはそれとして、欧米と日本をそれぞれ近代文明の農工と商販にたとえるこ

の比喩はなかなかうまいではありませんか。ここまで見てきて、私たちは一つの鮮明な中日の対照に直面させられることになります。それはつまり、蔡の口調には、西洋人に此方の真似をさせて主客の位置をかえる「斯ゝる日は、到底日本の上を照らさないと諦めていた」という漱石の悲観はもとより、あの鷗外の、日本で結んだ学術の果実を欧羅巴へ輸出する時も「いつかは来るだろう」式の慎重さ—あるいは、言いよどみでしょうか—のひとかけらもみあたらないことです。ともに近代日本のトップ頭脳である漱石と鷗外にして、維新後四十余年、「文明開化」が一応規模を具え、「富国強兵」も日露戦争の大勝でピークに達した時点であんな悲観調または小心翼翼たる発言しかできなかったわけですが、それに対し、蔡の方はスタートを切る前から「超軼」が当然と決まっていたのです。それは彼一個にとどまるものではありません。小国であり弟子であった日本が「わずか三十余年で六大強国に仲間入りできたくらいなら、吾輩がやって、事半ばにして功倍なり」のできないはずはなかるう」（孫文、東京留学生に対する講演）という、いわば国民的レベルの論理にまでなりますし、さらには、陳天華の次のような発言まででてくることになります。「欧米が数百年をかけて達成したのを、日本が四十年でそれに追いつき、日本が四十年を以てできたのを、われら

がさらにそれに比例してできないことがあるか」と。前半の計算は言葉まで漱石が『現代日本の開化』で言ったのとそっくりです。ところが、話のおちつくところは、それ（数百から四十に短縮）だから、危ない、「一敗また起つ能わざる」破局になるぞ、と焦慮してやまなかった漱石と、何と対照の際立ったことでしよう。かりに、陳天華を六年後まで存命させ、漱石の講演を聞かせ、さらに対談までさせたと空想してみましよう。それでも、各自の置かれた発展段階と歴史的課題が違いますし、そのうえ数千年の中華文明に培われた神経の強靱さと言いかずぶといところがあり、漱石らの「和魂」とか「自己本位」とは同質、同スケールのものではないため、後者の主張を聞かせたとしても、この当然主人、超軼疑いなしの姿勢はビクともしなかったのではないでしようか。

しかし、ここに紹介してきたような表現志向上のワン・パターンがあるからといって、後世の論者たちが直訳したように、当時の留学生たちが明治日本をただの新知識のショーウィンドウと見ていたのか、と言えば、決してそう単純ではありませんでした。蔡鍔は、（中国の「文明の祖国」に対して）日本を「東洋史上に唯一の、善く学び善く変わる、進取精神の祖国」と位置づけておりますし、また、女侠秋瑾にとって「東京はわが国の志士の勢ぞろいの場で、そこに救国の同

志を捜し求め」ることの出来る梁山泊であつたのです。大多数の留学生がここへ来て「尋ね求めるものは、大抵、新しい知識」（魯迅）だつた反面、「昔の光り」に浸りがちの排満光復の士にとつては日本はまた「なかば異域なかば古昔」（周作人）とも映りました。清朝の禁書を収集・翻刻・密輸などして「懐旧の蓄念（おもひ）を攄（の）べ、古えを思（い）ふ幽（ひそ）たる情（こころ）を発し、祖宗の玄（ふか）き靈（たまし）を光（かが）かせ、大漢の天（てん）声を振（お）さん」（留学生誌『漢声』題辭）とすること、つまり旧を尋ねて光復をはかることまでできたのが、この日本という留学先だつたのです。

#### 教育普及にうけた示唆と衝撃

ある留学生が「日本の強国になつたわけを究めれば、何人も学ばざるものではなく、国民皆兵の二点につきる」と言いました。平凡なようですが、ここには初期の留学生や視察者たちの日本印象記の最大公約数が示されています。

そもそも彼らの日本留学は「（何ぞ興るのにわかなるや）伊藤、山縣、榎本、陸奥の諸人はみな二十年前出洋の学生なり……学成りて帰り、将相に用いられて、もつて政治一変し、東洋に雄視する」という一代の名言に刺激されたものであり、一方、日本に来るまでの視野は今の英才教育の域を脱していませんでし



た。それが来てみると、「道行く人を通じ男女の学生で十中六七を占め」、「賤しく車夫侍女の如きも字を識らぬものは無く、暇あれば則ち新聞など読む」風景に出会い、ひきつけられ、「心ある者で、羨むから敬う、敬うから愧じる、愧じるから畏れるのをどうして免れることができよう」の嘆声が漏れるようになりました。そういえば、当時の大量の日本視察記が例外なく日本の教育普及、民智開けた様子を伝えていますが、そこには「車夫が新聞を手に、かつ読みかつ談ずるのを見る、苦力ツリといえども書生風漂う」とか「朝作生徒暮作商／商人少婦熟相場」（朝は生徒となり、暮は商をする、店の若い女も相場に通じる）とかいった描寫がじつに頻出しています。（中には中国文人の常套用語の「販夫走卒、引車賣漿の徒と雖うんぬん」をそのまま用いたのもありますが）「車夫侍女」も「販夫走卒」も、それにまつわる極度の輕蔑意識があつたらばこそ、よけい印象強烈な開化風景として目にやきついたのでしょう。ところで、そういう中で、若い留學生の觀察眼はさすがに違っています。

日本の学校の多いことはわが国のアヘン館のそれに似ており、日本の学生の多いことはわが国のアヘン常習者のそれに似ている。（『北京新聞彙

まったく痛烈この上ない皮肉な表現です。やはり人一倍感じやすく憂国の情の深い若者であればこそ、一言にこんな深刻な比較観を凝縮させることができたのでしょう。

それから、女子教育の印象について。全体、黄遵憲が『日本雜事詩』で「膚凝脂すべの如くして髪漆おんじの如し、蓋し山川清淑せいしよくの氣鍾あつまる所なる」と日本女子を描き、「都道溫柔すいおんじゆう是嬌郷これむさう」と謳って以来半世紀余、中国文人の描いた日本女性像には感情こまやかなところが多く、それが若い留学生においては「沈淪」（郁達夫の小説名）の世界にもつながっていくのですが、それはともかくとして、渡ってきた学習者たちの目には、女学振興の風景がやはり格別に印象鮮やかなものだったようです。「白綾衫襖紫羅裙／書筆生香又一群／新受下田歌子教／未成年不嫁夫君」（しろきぬの着物に、むらさきのはかま、書筆にかおりただようまたひとむれ、あらたにうける下田歌子のおしえ、いまだ成年にあらざらば夫君に嫁さず）（『日京竹枝詞』）、女学校でも名門の華族女学校あるいは実践女学校の、さっそうとした女学生姿が躍如たる感じでした。こんな清楚（白）明朗（紫）でいきいきとした“一群”また“一群”に、日々目睫の間に接していると、「朝から晩まで閨房にとじこもり、脂粉を凝らし身なりを飾って能事終われりとし、動物園の

檻に在る玩弄物のようなわが国の女子を以てして如何にくらべられよう」  
（『浙江潮』第二期「東京雜事詩」註）との感嘆の声を発しても不思議はなかつたでしょう。早婚社会ゆえ、彼らの約九割が妻帯者であつたといわれています。つまり我が家にも「女子才無きはこれ徳なり」の古訓と纏足など陋習を強いられたの「玩弄物」をもつていたわけです。そういった彼らの状況を考えれば、いま聞いた感嘆に、いかに口惜しく、沈痛の情がひそんでいるか想像に難くないでしょう。

そういう中で、教育視察官のトップにあつた京師大学堂総教習吳汝綸の感想はちよつと面白い。東京に着いてすぐ上陸以来の感想を聞かれた彼が、答えていうに、第一点「小学教育の普及にして寒村僻地も小学校の設けあらざるはなく、：最も驚嘆したる」、第二点「日本女子体育發達の現状に感ずるところあり殊に東宮妃殿下の二皇孫を挙げられし実例に見て感を深くし」たる（『二六新報』明治三五・七・一）といひます。いい年の大儒にしては妙な「実例」をあげたものだ、と思つていたら、彼の東京到着（明治三五・六・二八）の時はちょうど、各新聞がいつせいに第二皇孫（のち淳宮）の「御降誕」を報じてにぎやかなところだつたのです。

ところで、いま触れた小学教育の普及についてですが、それは「東亜同文会」(近衛篤磨会長)の有名なたちから現場の嘉納治五郎たちまで熱心に勧め、そして留学生たちが明治社会の中で身をもって体験した真理みたいなものです。当時はやりのビスマルクが普仏戦争の勝利を小学教育に功を帰したというような教育美談から、日本が一戦してわが国に勝ち、二戦してロシアに勝てたのもっぱら「学校が興って教育がさかえ、教育がさかえて民智が開き、熱心な士がさらに鼓吹と助長につとめて国民皆兵主義を高揚させるに至った」(蔡鍔)という生きた教訓まで、いずれも留学生たちに国民教育普及の必要を痛感させ、そして結果的に今世紀初頭の中国近代教育の勃興につながったわけです。しかし、実際の留学生生活の次元においては、東京の街を行く「清国留学生」たちが、まさにそういったプロシア式(?)国民教育をうけた軍国少年たちによって、「チャンチャン坊主」と野次られ、喧嘩を挑まれたりしていたのです。一九〇五年夏のある日、一人の留学生が三省堂へ行く途中、数人の小学生に石を投げられ、お巡りさんに訴えても容れられることなく泣き寝入りの結果になりました。それで、彼は「(中国の)人々はただ、日本が強かったのは軍隊が強からだと思い、この国が小学の段階から、すでに子供達にたいし不撓不屈の精神教育を施しているのを知らな

い」と嘆き、児童たちに「野心を植えつけ、道德を注ぎこみ、体力をつけさせる」のを重点とする日本の小学校こそ「日本の富強の礎である」という結論を導きだしました。（王朝佑『我之日本観』）さっき「学ばざる者はなく、国民皆兵」の二点を指摘した某留学生も、つづけてこう言っています。

ただし対外に人を敵視しやすく度量が狭い。小学から教科書に敵国事情を盛り込み、先生がくわしさを厭わず講義し、幼い頭に浸透させようと務む。あるとき、それに載った中国とロシアの故事を窺いたら、行間に勃々たる拡張の野心が感じられた。効力でいえば固より強国の本であるが、対外的にみれば善隣の道にそむき他人を傷つけよう。島国人民の性質がそうさせるもので、武士道と大和魂にも、やはり欠陥なきにしもあらず、ということか。

さっきの例のように、小学生にいじめられてもそこから教訓を汲みとろうとする態度と、「武士道にも欠陥があることか」とむしろ残念がる語氣に、なるべく人に長所を学び取り自省の鑑にするという清末留学生に共通の姿勢が反映していて、いじらしくさえ感じられます。しかし、そういう彼らであっても、次のような場面にあったとすれば、さすがに傷つくことでしょう。「ある日、下宿屋に一人の婦人が十二、三の女の子をつれて泊りにきた。その子が僕の部屋にも遊びに

来たが、突然壁にかかった中国の地図をさして、それは将来日本のものね、と言った。はっと聞き返したら、だって日本の兵隊さんは強く中国のはだめでしょ、中国人はしっかりしないから亡びるんだって。亡びたら中国の土地も日本になるでしょう、と答えた。それを聞いて頭がのぼせてしまい、言い争えば小さな子供のことだし、何か争わなければのぼせた血がおさまらなくておさまらなくて……」

言ってみれば中日間に今日までくすぶっては燃える「教科書問題」の原形みたいなものではないでしょうか。

### 日露戦争に刺激されて

日露開戦にあたり、在日留学生はもちろん、「中国内地の人で、それを知らない者を除いて日本戦勝を望まない者はない」と、ある総合雑誌にこのような記事がみられます。なぜかというところ、「今日、中国人の心に二大問題がある、一、専制が立憲かである。もし専制国ロシアが勝てばわが政府は専制をつづけ憲政を拒む口実を得るだろう、二、黄色人種と白色人種の優勝劣敗である。もし発奮自強の日本が負ければ、わが人民はそれを天演の公理と思い込んで意気沮喪し、一切

の機運を絶つてしまふだろう」（『東方雜誌』）と。そのように考えるのが、當時の論理であり、風潮でありました。そして実際に、日本留学生が千人前後（一九〇四年初）から万人近く（〇五年末）と爆発的に増え、なかでも陸軍留学生が何倍増を示したのは、黄色人種キャプテン日本が勝ち進む中で発生した現象にほかなりません。

あの熱烈な愛国家秋瑾女士でさえ、北京で（日本に出発前）開戦の報に接して「捷報飛び来りて大地歎び／自今世界安瀾を慶する／草木山河みな色をなして／未だ許さず、潜蛟の側目して看るを」と対ロシアの緒戦を、ロシアだけでなく長年洋上から東漸してやまなかつた“潜る蛟”に対する開戦、東亜の黄色人種の世界に平和をもたらす開戦としてうけとめ、喜びました。そして秋のある日、たまたま征露兵士と同じ列車に乗って横浜に行く彼女は、新橋の駅前から行く先々の停車駅のホームにまで繰り広げられた熱狂的な場面に圧倒されてしまいました。翌日、彼女は「我が同胞に警告す」の一文を著し、目に焼きつき耳にこびりついた群衆の海、日の丸の海、軍楽の奏鳴と“万歳”の合唱などなどを同胞に知ってもらおうと描き、「もっとも羨ましいのはあの子供たちの姿、チビっ子から学校の生徒まで道の両側にきちんと整列して旗をふり、万歳を高唱している様子は可

愛いやら、せつなくなるやら、わが祖国に何時になったらそんな日がおとずれ得るだろう」と感極まっております。それは、日露開戦とその後の連戦連勝に沸き立つ東京の街にいた、数百数千の中国の若者たちに共通した感想と言っているのです。

早くも五、六年前、日本亡命初期の梁啓超は、ある日、「上野あたりを散策して街じゅうに赤白の幕や幟がかかっているのを見、それは、入営者を送るものとわかった……中に二、三本『祈戦死』と書いたのが目にとび込んできて愕然となり肅然となって、その場を去ることができなかった」、そこで、彼は「かつて甲午戦争の頃日本の新聞などに載った壮行詩がみな生還勿れと祈るのを見た」ことを思い起こし、杜甫の「兵車行」を含む「中国歴代の詩歌はみな従軍苦をうたっている」事実と対照してみても、彼なりに（というのは当時の日本でこのような「支那人論」が一般化しているのを彼もよく知っているのですが）「日本の風俗と中国の風俗の大きく異なる一端はすなわち、尚武（武をとうとぶ）と右文（文にかたよる）である」（以上「祈戦死」、『清議報』）という結論に到達しました。そこから生れたのは、「天演の公例に徴してみれば、尚武精神は国家存立の第一の基礎で、今日に処して軍国主義を取らなければ、その国は必ず天地の間



に存立するに足らぬ」(「斯巴達小志」『新民叢報』十三期)という信念であり、それがさらに愛弟子の蔡鍔によって結実させられたのが「軍国民篇」という名論文であります。

「筆を投げて従軍」組のエリートだけあって、蔡鍔は早くから一、二の表面現象を通りこして日本社会に彌漫している「臥薪嘗胆」風潮に目をつけ、「その帝国干渉の主義、恐怖堅忍の情況から推しはかれば、殆ど一日たりとも大陸間の大戦に趨き、東西両洋に臨んで有事たらん如く感じさせない日はない」(「湖南士紳に致す書」)と指摘しました。そこから導き出されたのは、後の時代のように、イデオロギーによる帝国主義批判でなく、また新興日本帝国主義に対する警戒とか糾弾でもなくて、軍国主義(これは後には憎むべき軍国主義としてしか覚えられず、現に中国の辞書にも日本の事典類にも民の附いた箇条が見つからない)の声高らかな提唱だったということは、清末の背に腹は代えられない事情を如実に反映していると思われまゝ。ただ、他の叫んだり嘆いたりするだけの人にくらべ蔡鍔の見識が卓越したところは、「日本が徴兵実施の初期、国民の間にも“血税”だと言って抵抗が多く、暴動さえ起こった」が、今日の国民皆兵の熱気はやはり教育普及による民智開化と、国の諸措置や民間の提唱が効を奏し

たのだ、という発展論的な歴史認識を具えていたことです。そこから、彼は、中国もこれから方向転換しさえすれば軍国民精神の養成と国民皆兵の実現も不可能ではないという確信を得、ここに立脚して「軍国民篇」を書き、教育、哲学、文芸、風俗から体質づくりや兵制兵器の改良の各方面にわたって日本を鑑にしながら軍国民「建造」の綱領を提示したのです。

それから、その後の時代には非常に耳ざわりにきこえた「武士道」も当時ではかなり関心の持たれた対象でした。蔡が「軍国民篇」の結語で「軍国民を建造しようとするば、必ず先に国魂を陶鑄しなければならない」と提起したのも、もっぱら、「武士道こそ日本の国魂であり、日本の国がなりたち明治維新が成立した本である」という認識に刺激されたからです。そして、日露戦争のさなかにおよんで、今まではただ日本を羨ましがって自信のなかった梁啓超もすっかり自信づけられ、「日本より輸入して通行する名詞を取って」わが民族の武勇の伝統を掘りおこし、『中国之武士道』の一著を世に問うようになりました。

それほどまでに日本の対露開戦にはげまされ学ぼうとした中国人留学生たちは、しかし、戦勝に増長した東京の街ではますます冷たい仕打を受けなければならなくなりました。魯迅が「藤野先生」の中で描いた、連戦連勝にともなったま

わりの目つきと待遇の変化は有名ですが、こんな詩も現れました。「三呼万才東京を震わせ／挙国の商農ことごとく兵なり／十五万人祝捷にわいて／人が笑を含みてわれ氣を呑む」と。それは、『時事新報』（明治三八・六・十八）の報じた多数の老年留学生（いずれも開戦後にあこがれて来た）中のナンバー・ツー、周霞という六十四才の老人が詠んだもので、一般の心境を反映しています。自分の一方的な意識過剰ではなくて実際に白い目をむけられた例はあげきれないほどですが、その中でとくに、先にも出ていますが「度量が狭い」と、一種独特の「無神経」さの二点が、もっとも在日の留学生たちを傷つけ、そしてつき離してしまうものなので、これについてももうすこし見る必要があります。

一八九八年、参謀本部の神尾光臣らは張之洞（地方総督のナンバー・ワンで北の親ロシアの李鴻章の対抗馬と目される）を相手に中日連盟工作と留学勧誘を始め、改革派の譚嗣同たちに会ったときに、「日中はもともと兄弟の国なのに朝鮮の一戦で仇同志になってしまい、まったく不本意だった、……顧るたびに悔恨それにまさるものはない」（唐才常「論中国宜与英日聯盟」）と言っておりまう。しかし、その誠意を信じて（全体、初期の新派の人たちが国際関係には非常に幼稚単純だった）東京にやって来てみたら、彼らを待っていたのは「遊就館」とい

うところでした。今日とみに有名になった九段下は靖国神社境内に常設された当館は、清末以後そこに行つた中国人を例外なく傷つけ、先生の国すなわち仇敵の国なるをいまさら思い知らせるような名所でした。三十年代まで種々の日本遊記にその記録を絶やしておりません。日本にしてみれば、戦死者を祀る神社内に日清、日露の戦利品を陳列するだけのことも知れませんが、なにしろ、館に入る前から「外に戦勝の具堆く積もり、見ればわが国とロシアの銃器、大砲類」であつた上に、「入口の左右両側に一つずつ軍艦の換気口が置かれ、清国靖遠号換気口」“清国来遠号換気口”と札をつけてある」のが目にさざります。館内には、「李鴻の書いた“海軍公所”の看板、葉志超の“帥”旗や伝令旗。“海疆鎖鑰”と題した扁額など」（以上、馮延鏐『東遊鴻爪録』）をはじめ四百点近くの戦利品が並んでいます。軍司令官の旗幟と艦隊本部の玄関の表札までぶんどられてしまつた事実、近代初の艦隊の全滅後に見た“海疆鎖鑰”の四字ほど留学生たちにとつてはげしい恥辱と辛辣な皮肉もなかつたでしょう。まあ、それは筋から言えば「この館は人がもつて功を記しわれが恥を銘ず、人がもつて氣を壮んにしわれが心を痛めるところ」であつても、戦いを交えて負けたものだから「人にかくれて涙にむせ、壁に面じて声を吞む」（李大釗「警告全国父老書」）しかなか

ったのかもしれませんが。しかし、次のような展示の意匠はどうでしょうか。「なお二つの物があつて、尤も腸の煮え返る至りであつた。すなわち中日交戦の時、我が領土で我が国民に降服を通牒する告示文を刷る二枚の大きな板木であり、その文に曰くうんぬん」というのがあり、「甚だしきは忽必烈クビライが日本遠征して負かされた故事まで麗々しく絵にして陳列に加えてある」のです。このような展示内容に接すれば、これでもかこれでもかというところを感じさせられ、何という狭量なことかとうけとめて反感をたかぶらせたケースが多かつたのももつともなことです。

それから、「臥薪嘗胆」と対清工作の必要から「東亜同文会」などを通じて黄禍論をあばき、同文同種や東亜連盟を唱えているかと思つと、中国分割すべしと主張するときには、竹越与三郎のなしたような黄禍論顔負けの「中国人種世界侵略」論（曰く、人種的に見て鼠のように繁殖する中国人はすでにシヤム、コーチ、マレーにあふれ、時来れば北はシベリア、西はチベット、インドを経てヨーロッパに侵入する）が中国人留学生の耳にはいつてきます。（『清議報全編』外論彙訳集）実際問題として、大阪で行なわれる第五回内国勸業博覧会で「アイヌ、台湾生蕃、琉球、朝鮮、支那、印度、爪哇等の土人を傭い……観覧せしむ

る」(『国民新聞』明治三十六・二・十一日付)人類館を設置するとの報に、そういつた並列のしかたを怒った日本留学生初の対日争議が起こったり、劣等民族視された“支那人”のシンボルとして、女の纏足と男のアヘンセットなど(遊就館の陳列にもそれがあった)が、東京では留学生の集中する神田あたりの活動屋で幕間に“支那芸人”の手品師によって小道具のように使われ、留学生の騒動を惹起したりもしています。後者の方は、みつかる記録だけで一九〇五年の夏に二回も起っています。まったく情ない悪趣味というほかありません。

それは、あるいは別に他意がなかったかもしれないところから、もう一つの摩擦を生む構造——いつもそれに附合わされ扼腕の思いを禁じえなかった経験を持つ筆者が呼ぶに——独りよがりの“無神経”さにつながっていきます。

たとえば東亜同文会発足後の「中国志士に与う書」(『清議報全編』による)にこんな意味のことが書いてあります。「(中華古国は)今でこそわが日本と同列に論ずることができないようだが、長所がなかったわけでない。何かといえば、商売に長けること、蓋し世界一である」と。それは、(無言のうちに察してあげる日本式と違って)言った言葉の“弦外の音”に耳をそばだてたり“但し書”に興味を凝らす中国文人にとっては、褒め言葉になるものでしょうか、それとも皮

肉でしようか。留学生教育の現場ではなおのこと、「開講の日に教員が講壇に登って演説し、風刺の語が多い……中国人が通商に長じ日本人が愛国に長じるとの二語があり、その意を窺うに通商とは、中国人の日本留学は卸し買いに来るようなもので、帰国後地位と数倍の利益を獲得するのが目的なんだ、という含みらしい」（『東遊鴻爪録』）といった類の記録も一つや二つではありませんでした。

自分たちの留学にひきつける後半に勘繰る要素があつたにしても、四十年代までにある日本人が認めたように「支那人は極めて実利主義の国民であつて、人情道徳もない拝金民族であるという古い観念」（『一中華人の見た日本精神』坂平康平序）、つまり貶めの偏見が広く存在していたに違いありません。嘆かわしいかな、悪意のない場合でも偏見を偏見と気づかず、誇り高い中国文人の肩を叩き叩き、「氣を落とすな、諸君にもこれこれと良いところがあるから」式の激励は、「ばかにしやがれ！」以外のなものでもありませんでした。

しかし、それらにくらべて、こんな例はどうでしょう。その時、船は大抵、長崎、下関、神戸……と行き、下関ではわりと停泊時間があるので、よく地元の友好人士に市内見物に案内されたりします。それは結構なことですが、問題はよく案内のコースに組み入れられる一つの項目です。

ある高樓が聳え立ち、扁額に“春帆”と題してある。すると、その日本人が指していわく、お国の李鴻章宰相が当年、すなわちこの樓で講和条約にサインをしたのだと。この言を聞いた途端、心の中で愧じて愧じてたまらなく、遂に七言絶句二章を得て国恥を記す。……（陳嘉言『東遊考察日記』）

詩の首句は「当頭一棒語驕人」（真向から痛打を浴びてその語驕慢たり）となっていて、「その時、日本人の表情に頗る得意の色がある」の註が付いています。実際にそういった表情がまざったかも知れませんが、それより、案内といえは親切をつくしてあっちこっち連れて歩く日本人らしい親切さと、好んで前朝故事を持ち出して忠奸とか栄辱とかに（中国人にくらべて）ルーズな、漢学好きな日本人特有の性癖からだとかこれを解釈したいと思います。つまり、彼らの感覚ではむしろ、お国の伊藤博文殿様は、と言った方が尊重に聞こえると思い、そんな口調でサビースしているつもりだったかも知れません。やはり彼らには、このコースを通して来日した中国の若者たちが十中八九、“春帆樓”の下へつれてこれなくともここ“馬関”の地を「憐むべし万古傷心の地／第一に忘れ難きは此の関なり」（留學生の詩）としてきた事実と心情など、つゆほども知らなかったことでしょう。



それら意識的無意識的な蔑視、貶め、“驕慢”さの中にいて、つとめて学ぼう知ろうという心のある愛国者や文化人ほど、一方では傷つきやすかったようです。だから、陳天華らの心の底にある“仇敵の国”の意識が深まりこそすれ消えたりはせず、そして、明治日本の有名文人と親交のあった章炳麟が創り、その後一世を領じた日本論の大家周作人が（節を失するまでに）一度ならずふれたこんなパターンも生まれたのです。

清末、章太炎が日本に亡命したとき、つねに書をたのみに来る日本人に『孟子』の一段を書いて曰く、「逢蒙、射を羿に学ぶ。羿の道を盡くして、思へらく、天下惟羿のみ己に愈れりと為す、と。是に於て羿を殺せり」（訳註『孟子・離婁章句下』）それは、中国知識階級の日本に対する最も普通の感想だといえよう。（周作人「朝鮮童話集序」『看雲集』、一九三一）

#### 日本論への志向と傾向性

かつて、清末以来中国の日本留学関係者が世界の留学史上でも空前の数だった割には、日本論の名著が生まれていないとの評を聞いたことがあります、あたっているとします。

そもそも、当時の東京は、革命家や亡命客の梁山泊、進歩的青年の新學速成所、新式科擧志向者の“銀メッキ”工場、また旧弊文人や俗吏の“東洋”趣味の遊樂場でさえありました。東中国海の海上を行ったり来たり、「其多きは江を過ぐる鯽の如し」と表現されていますが、誰もが己の思い込みに汲々としてせわしく、日本そのものをジッと見、ゆっくり考えたり味わったりする余裕もなければ、興味もなかったようです。明治末まで、東京には前後六十數種類の留學界刊行物が行なわれていたとはいえ、ほとんどが国内では發表することのできない各種の主義主張を翻訳紹介し、鼓吹と論戰をする場でした。よしや、独自の日本觀察をまめに綴ったものがあっても普通の學生にはそれを自家版で出す力などなく、だから、たとえばいま東京の実藤文庫に集められた二百數十種の日本遊記類は、ほとんど視察官紳の參觀日記や新政資料のよせあつめ程度のものです。たいして識見がなく、ものの感じかたも上層階級のそれに限られたこれらの書物を、ストリートに清末知識人の日本認識とうけとめては當を失しかねない、というのが現状です。

にもかかわらず、後の二、三十年代に日本論を代表した載季陶ら政治評論家系列と周作人ら文化人系列が準備されたのは、この時代においてであつたのだし、

まえに見た蔡鐸のように留学当時から積極的に明治日本の秘密を探ろう、論じようとした者も現れてはいました。

前述の郷里の同胞にアピールする書の中で、蔡は「欧米との交通、中国が日本より先、外患の迫ること、中国が日本に同じ」、そして欧米の近代文明に関する翻訳や紹介はむしろ中国で始められたのに、「何故東瀛を感化するの独り猛々しく効著しきかな」という、実に重大な問題提起をしました。というのはこの間いこそ、前世紀末以来の中国人の頭にこびりついて数十年の間くすぶるの止むなきにいたってやっと、新しい開放時代を迎えた（それもいま一度の鎖国を脱してみたら敗戦日本の経済「奇跡」にまたしても直面させられてしまった）今日新たに持ち上がった、まさに新しく古典的な問題なのであります。しかも、いまでも解き明かされたとは言えません。

さて、約九十年前の蔡から見て、なぜ東漸してきた同じ力が「東瀛を感化して独り猛々し」かったのでしょうか。

識者曰く、幕府がそれに預かって功績あり、これを忘れることはできない。

明治以前に既にお金を出して若者を欧米留学に遣わし、おかげで維新の諸豪傑が育ったのは、幕府の功であった。和蘭学を治めるなど幕府数百年に新し

い士を養った。福沢諭吉が唱えはじめて以来、ことごとく文明を輸入できるようになったのも、幕府が文治を盛んにした後を受けたものである。以上の三つの因が具わって、欧米蘭学の書籍がじょじょに入り、ラテン・英・仏・露・独など蟹行文字が、漢字仮名交じりの一色をすっかり変えた。しかるに、日皇が尊攘の勢いによって復権を果たし、復権したうえで直ちに攘夷などを排して開放を主唱して、徹底して西法を用い旧制旧俗を革め、精進してやまないことは、また幕府のなしたのに大きく増している。

たてに見れば、『采覧異言』以来の洋学史から明治維新の源流を探ろうとした黄遵憲と、角度をかえて「今日の維新の治は実に黃門一家の功なり」との解釈を試みた王韜と、同一系譜につながっているでしょうが、それにしても、日本で最後まで流行った一部の近代開化史観と、こんなにまでうまく符合していることは、まことに興味深い現象です。

と同時に、蔡鍔は、大和民族古来の「特別性質」から明治の成功の秘密を解こうとも試みたらしい。主旨だけ紹介すれば、「欧州の開化は、その理想が文に胚胎し、その精神が武に胚胎したが、日本は上古から文武の良質が混然一体となり、そこに彼の特別性質が定まり」、その後「和魂漢才」と「和胆洋器」の吸収

融合を経て「文の想いがますます横溢し、武の勢いがますます猛り」て今日の上昇機運になった、ということです。もう一人の留学生の概括をかりれば、こういった「日本の精神が西洋の物質によってその能を全うし、西洋の物質は日本の精神によってその用を尽くせた」ということになります。

この類の関心と論が現れ始めたのは、当時の日本現地にはやりつつあった国民性論などに触発された面も十分考えられますが、しかし、明治新政下の同じ事さらに対して、むしろ日本人より中国人のほうが積極的に肯定しようとする場合もままあります。明治前期の欧化主義と民権運動の「騒動」の当否（拙文「日本留学と『中体西用』」参照）から、明治日本人の「公德」の有無に至るまで、中国人が擁護、日本人が批判という立場の逆転が見られます。たとえば、「公德」の例で、かつて夏目漱石がロンドンを基準に「彼等八人二席ヲ譲ル、本邦人ノ如ク我儘ナラズ」と嘆いたのを聞いたかのように、「日本の人は国民の公德が欧米に及ばずと言うが、表面だけ見ても、公德心と文明の程度はすでにアジア諸国をぬきんでいる」「（秩序整然、老弱に席を譲る）日本の電車と汽車の中の様子を見て、その同胞愛祖国愛の熱烈なるを知る」といった意見がほとんどでした。それでは、最後に一つ、今の日本民族性などに対する関心や認識について、漱石一

流の見方と対蹠した例を挙げてしめくりとしましょう。

漱石の日本の開化の外発性と輕薄さに対する批判と憂慮は有名ですが、十年代以後の中国文壇に影響のあった厨川白村（彼の文明批評の立場と東大英文科教授の職歴の二点で漱石に似ている）にも、「立派な洋服を着ていて足には一足の下駄を穿く」田吾作ぶりを風刺した文章があり、中国に伝わりました。それに對し、早期留學生の劉大傑は「日本民族の健康さ」という一文でこう評しています。「厨川氏の文章は実に氣の利いた書きぶりではあるが、しかし、こうまで言う必要もないことである。年少で比較的野蛮な民族が幾多の困難を経過して文明の域にまで達するには、こうした醜態は免れないところである」と。

このところ、若き森林太郎の「少年とは成長するものである」の口調とそっくりなのに驚くしかありません。しかし、彼は鷗外の上述の言葉を讀んだわけではなく、彼は中国人留學生としてもつばら自國の問題に関心があり、そこから鑑なる日本少年を弁護する立場に到達したのです。そこにはまた、ひたむきに「成長」すればよかった森青年には味わえなかった苦汁が含まれていました。

……私はいつもこう思うのであるが、日本はいわば百姓の息子である。身体は強壯、頭腦は健全、一旦入学の機会がありさえすれば、彼はその吸収し

た外来文化を全部消化して全身の血管に送り、貴重な栄養分に変ずることができ、短期間に非常に大きな成績を挙げることができるのである。ところが中国という民族はそうではない。中国は恰も墮落した名門の子弟の如きものである。身体は衰弱し、全身これ悪劣な道楽に染まっており、本を読めばよく理解はするが、その吸収したものは全部消化することができず、貴重な栄養分と成すことができないばかりでなく、時としてはかえって身体を損なう毒素となることもある。（訳は信濃憂人『支那人の見た日本』による）

\*\*\*\*\* 発表を終えて \*\*\*\*\*

日本文学の一愛好者にすぎない筆者が中国近代史の分野、それも不幸な中日間のはざまに陥って苦しみ悩んだ一群の内面的世界に闖入してしまったことは、身のほどを知る知らぬはともかくとして、感情的になりやすく不安が多かった。そんな時に、日文研フォーラムに拙論を発表し、意見交換を通じて“心証”をたしかめ考えを深めるチャンスを提供していただいたことは、当時の『近代中国人留日精神史』の執筆に座標軸と自信を加えさせてくれ、とても有難かった。それにしても、一方の対日観もさることながら、清末以来の留日学生の問題ほど（彼らの置かれた事情といい抱えた問題意識といい）今日的で困惑の多いテーマはなかったと、つくづく思います。そういう困惑から抜け出す心情もあって、今後はもうすこし研究の分野を拡げ、近代または近世以来の中日間の他の課題に移って新しい仕事をしてみたい、そして日文研と交流を続けていきたいものです。





# 日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発 表 者 ・ テ ー マ
1	62.10.12 (1987)	アレッサンドロ・バロータ (ピサ大学助教授) Alessandro VALOTA 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11 (1987)	エンゲルベルト・ヨリッセン (日文研客員助教授) Engelbert JORIBEN 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	リー A. トンプソン (大阪大学助手) Lee A. THOMPSON 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19 (1988)	フォスコ・マライーニ (日文研客員教授) Fosco MARAINI 「庭園に見る東西文明のちがい」
5	63. 6.14 (1988)	宋 彙七 (慶北大学校師範大学副教授) Song Whi Chil 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9 (1988)	セップ・リンハルト (ウィーン大学教授) Sepp LINHART 「近世後期日本の遊び一拳を中心に」
⑦	63.10.11 (1988)	スーザン J. ネイピア (テキサス大学助教授) Susan NAPIER 「近代日本小説における女性像一現実と幻想一」
⑧	63.12.13 (1988)	ジェームズ C. ドビンス (オベリン大学助教授) James C. DOBBINS 「仏教に生きた中世の女性一恵信尼の書簡一」
⑨	元. 2.14 (1989)	嚴 安生 (北京外国語学院日本語学部助教授) Yan An Sheng 「中国人留学生の見た明治日本」
10	元. 4.11 (1989)	劉 敬文 (遼寧大学日本研究所副所長) Liu Jingwen 教育投資と日本の戦後経済高度成長」

11	元. 5. 9 (1989)	スザンヌ・ゲイ (オベリン大学助教授) Suzanne GAY 「中世京都における土倉酒屋—都市社会の自由とその限界—」
12	元. 6.13 (1989)	夏 剛 (京都工芸繊維大学助教授) Hsia Gang 「インタビュー・ノンフィクションの可能性—猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛りに—」
13	元. 7.11 (1989)	エルンスト・ロコバント (東洋大学助教授) Ernst LOKOWANDT 「国家神道を考える」

○は報告書既刊

\*\*\*\*\*

非売品

発行日 1989年7月31日

編集発行 国際日本文化研究センター

京都市西京区大原野東境谷町2-5-9

電話 (075) 331-4101

問合先 国際日本文化研究センター

管理部・研究協力課

\*\*\*\*\*

©1989 国際日本文化研究センター





■ 日時

1989年2月14日(火)

午後2時～4時

■ 場所

国際交流基金 京都支部

